

平成 18 年度

波介川河口導流事業埋蔵文化財発掘調査

現地説明会資料

かみ の むら

上ノ村遺跡



2007. 2. 25 (日)

午後 2 時～3 時

(財) 高知県文化財団埋蔵文化財センター
高知県教育委員会
国土交通省四国地方整備局高知河川国道事務所

波介川河口導流事業について

波介川は、仁淀川の支流にあたりますが上流に行くほど地盤の低い低奥型の地形であるため、大雨の際は幾度となく地域に洪水被害をもたらしてきました。特に昭和 50 年 8 月の台風 5 号による水害は流域に深刻な被害をもたらしました。

このような状況を受け、国土交通省では現在の合流点を仁淀川河口へ付け替え洪水時において仁淀川からの逆流による影響を除き、波介川の洪水を安全に流下させ、内水被害を大幅に軽減させることを目的に「波介川河口導流事業」を行なっています。

I 調査の概要

1. 発掘調査名

平成 18 年度 波介川河口導流事業埋蔵文化財発掘調査 上ノ村遺跡発掘調査

2. 発掘調査の目的

波介川河口導流事業計画区域内における事前の試掘確認調査を実施し、計画地内に所在する埋蔵文化財の中で工事により影響を受ける部分について記録保存のための発掘調査を行うとともに平成 18 年度の発掘調査出土遺物等の整理作業及び報告書作成を行い、埋蔵文化財の保護を図ることを目的とする。

3. 事業主体

国土交通省四国地方整備局高知河川国道事務所

4. 調査主体・実施機関

財団法人 高知県文化財団埋蔵文化財センター

高知県教育委員会

5. 調査場所

高知県土佐市新居上ノ村（図 1 上ノ村遺跡位置 1 参照）

6. 調査協力

国土交通省四国地方整備局高知河川国道事務所

土佐市教育委員会

7. 調査地点・面積・各調査区調査時期

調査区名	調査平面積	調査面数	調査のべ面積	調査時期
1-1 区	850㎡	一部 2 面	1150㎡	平成 18 年 5 月～ 8 月
1-2 区	1005㎡	2 面	2010㎡	平成 18 年 9 月～ 10 月
1-3 A 区	540㎡	3 面	1620㎡	平成 18 年 11 月～ 19 年 3 月
1-3 B 区	300㎡	2 面	600㎡	平成 18 年 12 月～ 19 年 3 月
2-1 区	5900㎡	1 面	5900㎡	平成 18 年 10 月～ 19 年 3 月

調査総面積 11280㎡

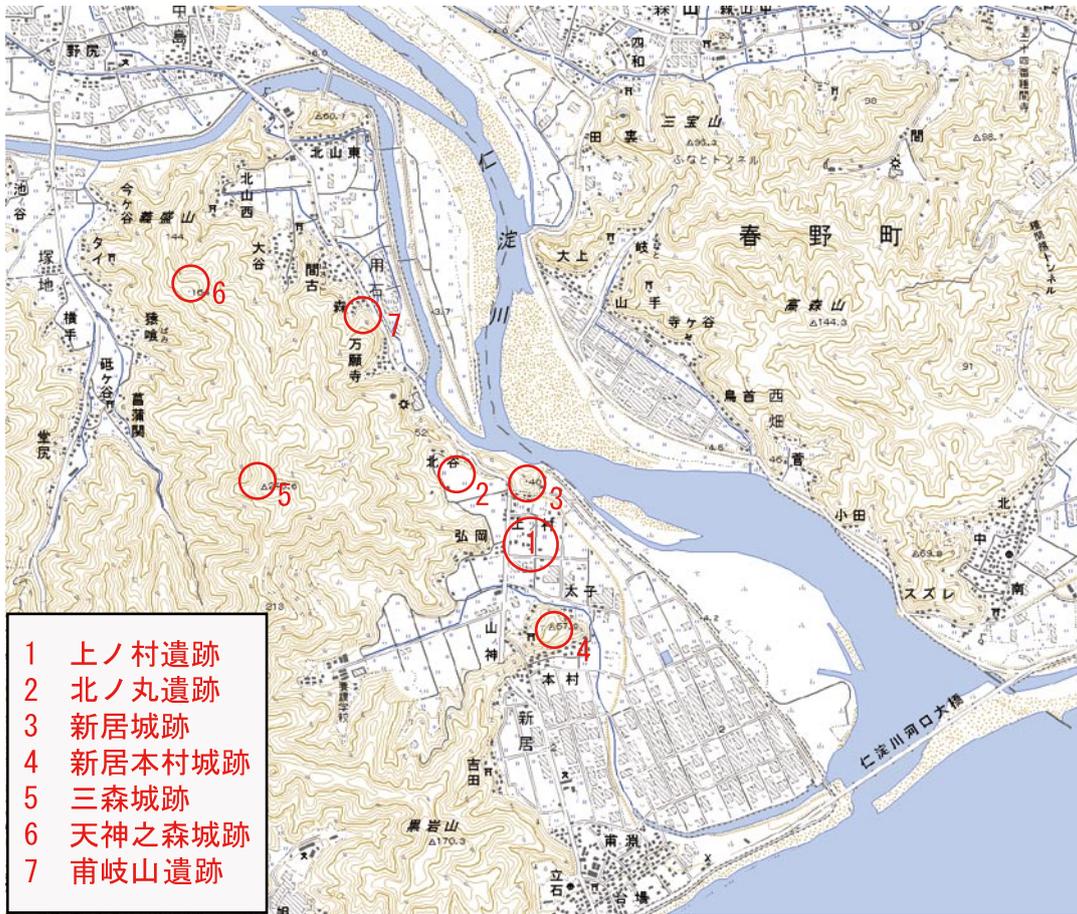


図1 上ノ村遺跡の位置と周辺の遺跡

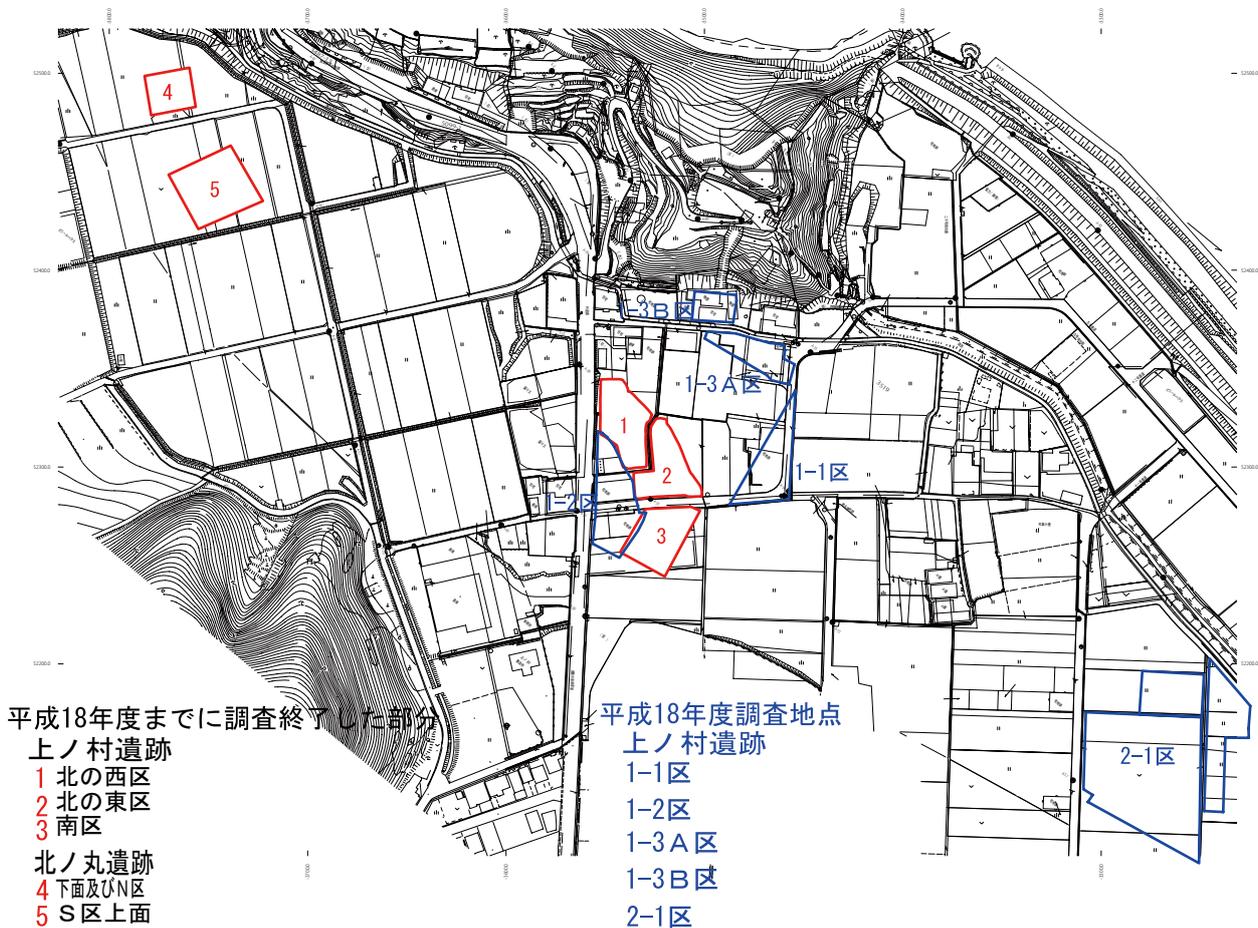


図2 これまでの調査を行った場所と本年度の調査区

Ⅱ これまでの調査

平成 16 年度 北ノ丸遺跡（周辺の遺跡分布図 2）

古墳時代（6 世紀後半）の木器が多く出土。

衣笠、琴は四国初出土、また準構造船（航海船）の舷側板も出土。

上記の様な希少な木器が出土することは、当地域が重要な地域であったことを示しています。

平成 17 年度 上ノ村遺跡（調査区位置図 1～3）

本年度調査 1 区、2 区に隣接しており、同じ遺跡の一部です。

古代（8 世紀～12 世紀）、中世（13 世紀～15 世紀）の遺跡と考えられます。

中国産の陶磁器や京都、大阪などの近畿や東海地方など高知県以外の地域で作られた陶磁器が多く出土しています。また、役所などで使われた緑釉陶器、黒色土器なども出土しています。河口に近く、仁淀川、波介川の合流地点である立地からみると水運に関わる重要な場所であったと考えられます。

Ⅲ 本年度（平成 18 年度）調査の内容

1. 各調査区の概要

1-1 区

箱形の堀方を持つ東西方向の溝や南北方向に伸びる石列が確認できました。柱穴はその内側から見つかり、溝、石列は屋敷の北東を区画する遺構の可能性が高いと考えられます。遺物は 14 世紀～15 世紀の青磁、土師質土器などが出土しています。当遺跡の中では新しい時期に属するものが多く新居城跡との関係が強い集落の一部と考えられます。

1-2 区

今年度の調査区の中ではもっとも西側の調査区です。昨年度の調査区と隣接しており、遺跡の様相もほぼ同一で、中世、古代の遺構遺物が見つかりました。

特に中世前期 12 世紀末から 13 世紀にかけての遺物が多く出土し、県外から持ち込まれた搬入品が多い特徴があります。14 世紀～15 世紀の遺構、遺物は少ない傾向が見られます。

1-3 区

新居城跡の直下にあたる調査区です。今回の調査で最も良好な遺構、遺物を確認することができました。特に中世の大型掘立柱建物跡と V 字状の溝跡、大形の割石を用いた井戸跡は高知県でも当該時期には類例の少ない貴重な発見です。建物跡では古代の建物跡を 1 棟確認し、さらに建物跡になると考えられる並んだ柱穴も確認しており、この周辺に複数棟の建物跡があったと考えられます。古代の建物跡の柱穴はいずれも四角で民家などの丸い柱穴とは異なり役所の可能性を示しています。

上ノ村遺跡の調査では初めて弥生時代の遺構、遺物を確認することができました。検出した遺構はいずれも規模の小さな溝跡ですが、中からほぼ完全な形の弥生時代中期末（約 2000 年前）の壺が出土した溝跡もあり、周辺には集落が存在した可能性を示しており、この地域では弥生時代には確実に人々の営みがあったことを示す貴重な資料となりました。出土した土器は瀬戸内地域の影響の強い土器で仁淀川流域では出土例がほとんどない土器であり地域間の交流を考える上でも貴重な資料です。

2-1 区

他の調査区からやや離れ最も現在の川に近い調査区です。溝状に延びる遺構と円形の小規模な柱穴、1m × 2.5m ほどの楕円形の浅い穴を確認しています。楕円形の浅い穴からは鉄滓が出土するものがあり鍛冶関連の遺構と考えられます。

近世以降の耕作のため土器を含む土層が削られたと考えられるため遺物は他の調査区よりは少ない状態でしたが、硯が 3 個出土したことは注目されます。出土遺物はいずれも中世 14 世紀～ 15 世紀のものと考えられます。このことから中世 14 世紀～ 15 世紀には新居城跡からやや離れたところまで集落が広がっており、集落の端の部分に鍛冶関連の施設が配置されていたことを示しており、集落構造を考える上で貴重な資料を得ることができました。

2. まとめ

1. 弥生時代中期には集落が営まれていた可能性が高く、瀬戸内地域の影響の強い土器を持っていました。
2. 上ノ村地域では古墳時代 6 世紀末以降、9 世紀～ 10 世紀、12 世紀末～ 13 世紀、14 世紀～ 15 世紀半ばまで断続的に人間の営みがあったことを確認できました。
3. 出土遺物は弥生時代以降いずれの時代でも運ばれてきた物（搬入品）が多く、交易に関係した施設が営まれていた可能性が高いと考えられます。
4. 上ノ村遺跡は河口に近く、波介川と仁淀川が合流する地点に隣接しており立地を考えると沿海航路と内陸地への河川航路の結節点にあたり、津（港）として機能していたと考えられます。
5. 津としての機能した施設はいずれの時代も権力による支配が行われていた可能性が高く、古代では役所による支配、中世には新居城跡に象徴される在地勢力による支配が行われていたことが考えられます。



01 1-1区 石列状遺構



02 1-1区 完掘状況



03 1-2区 上面遺構完掘状況



04 1-2区 溝状遺構遺物出土状況



05 1-2区 遺物出土状況



06 1-3区A区 大型掘建柱建物跡



07 1-3区A区 柱穴と柱



08 1-3区A区 柱穴出土椀



09 1-3区A区 V字上の溝跡



10 1-3区A区 井戸跡

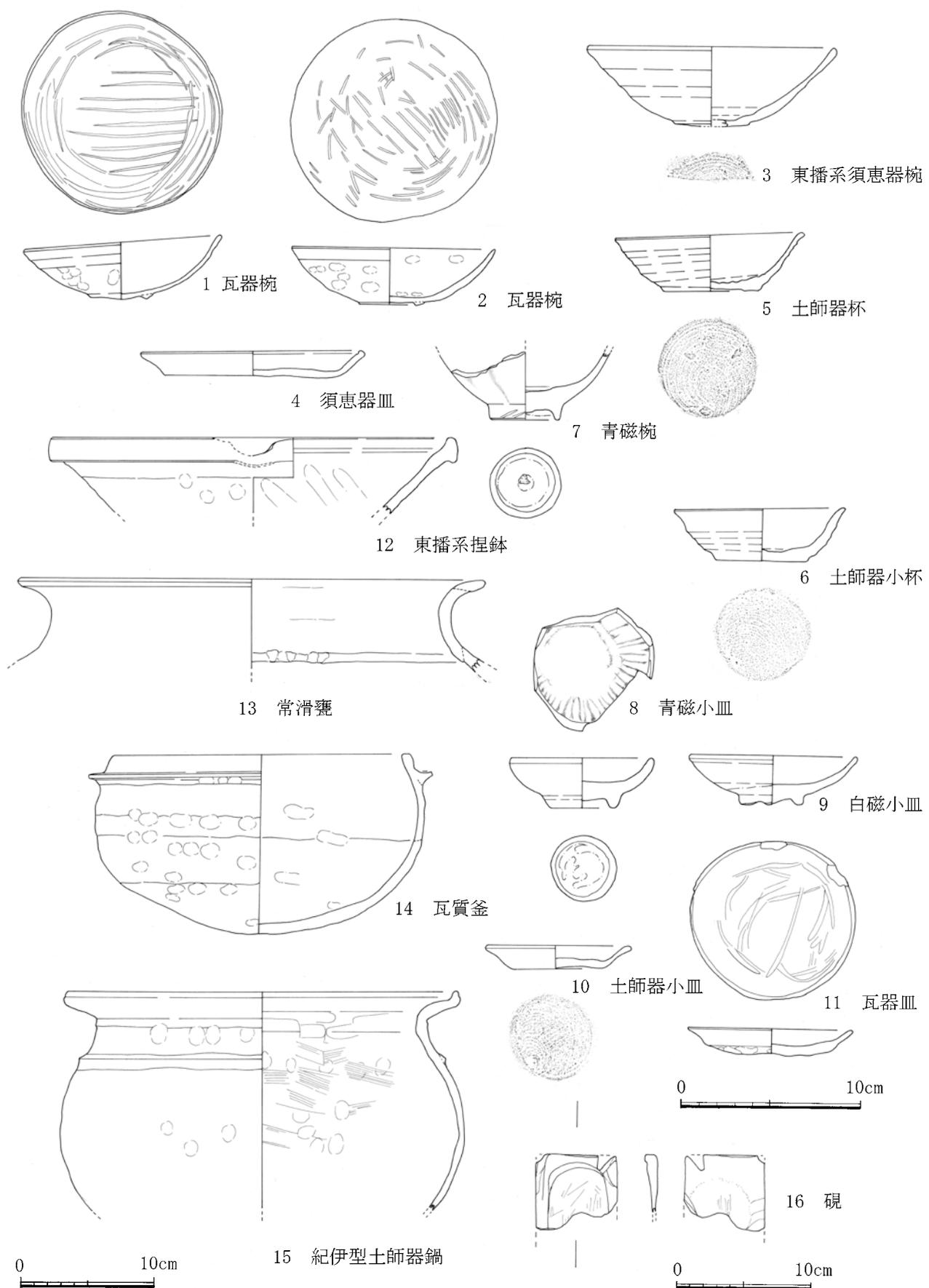


11 2-1区 スラグ出土状況



12 2-1区 出土硯

上ノ村遺跡写真



6, 8, 9, 10, 11 縮尺 1/3
 以外は縮尺 1/4

上ノ村遺跡出土遺物実測図



中世の上ノ村遺跡復元イメージ図